

ばんけい

教育ほつとにゅーす  
かわら版こ みち  
教育の小径No.71  
9月号

2014 September

今月のことば

めい きょう し すい  
明鏡止水

よこしまな思いや不純な考えがなく、静かに落ちついている心の状態を言います。わだかまりのない心を、曇りのない鏡と静かな水にたとえています。



国土館大学教授  
北 俊夫先生

## 交通安全教育の新しい課題

- 歩行者と自転車との間で発生する事故が社会問題になっています。事故に遭わないように、自転車の正しい乗り方を指導する必要があります。
- 交通事故から身を守り、交通事故を起こさないようにするためには、危険を未然に予測し、回避する危機管理能力を育てる交通安全教育が求められます。

今月の記念日

## 防災の日(9月1日)

台風、高潮、津波、地震など災害に対する認識を深め、平時の備えを確認する日として、昭和35年(1960年)に制定されました。大正12年のこの日に関東大震災が起きました。

## 交通安全教育の現状と課題

今年も秋の全国交通安全運動が実施されます。各学校や地域において、交通安全に関するさまざまな取り組みや行事が計画されていることと思います。

わが国では、かつて「交通戦争」などと言われた頃がありました。交通事故ゼロを目指して、学校を中心に地域ぐるみで交通安全教育に取り組んできた歴史があります。学校では、特別活動の時間などに横断歩道や踏み切りの渡り方、自転車の乗り方、登下校の指導など、交通安全教育を熱心に行ってきました。その結果、子どもたちや国民の間に交通安全のためのルールやマナーがかなり定着してきていると言えます。

平成25年における交通事故死者数は4,373人でした。そのうち、児童生徒の死者数は減少傾向にあります。それでも106人もいます。特に登下校中の子どもが巻き込まれる交通事故が相次いで発生しています。

最近、自転車と歩行者との間で起こる事故が多発し、社会問題になっています。歩道を歩いていて自転車と接触しそうな経験のある人もいます。課題は自転車の利用マナーです。そのため、自転車専用道路の整備など歩行者と自転車の分離も進められています。

このことは自転車と自動車と同様な扱いがされるということです。自転車は法律上一般の自動車と同じ「車両(軽車両)」に分類されているのです。

例えば、常に車道左側を通行すること、歩道を走ること、歩行者を保護する義務があること、乗りながら携帯電話の操作をしてはいけないこと、さらに、大人の場合には飲酒運転をしてはいけないことなどです。これらは違反の対象として処罰されます。小学生の場合、自転車に乗るときにはヘルメット着用を徹底することも必要でしょう。

学校や地域で実施される交通安全教室などの機会には、自転車事故の被害者にも加害者にもならないようにするために、自転車の正しい乗り方について改めて指導したいものです。

## 求められる危機管理能力

交通事故を防止するとは、自分が事故に遭わないようにすること、相手を事故に巻き込まないという2つの意味があります。そのためには、交通ルールを身につけ、それを正しく実践することが大切です。知識として知っていても、それが正しく実践できなければ事故は防げません。「正しく」とは、その場その場の状況に応じて適切に判断し行動することです。

知識と実践を結びつけるものが「危機管理能力」です。具体的には、周りの状況を観察・察知し、起こりうるさまざまな危険の可能性を未然に予測すること、そしてそれにもとづいて事前に危険を回避する行動をとることです。

万が一事故に遭遇したときの対処方法を身につけさせると同時に、危険を予測する能力や回避する能力を育てます。これらの能力を育てるためには、周囲の状況を正しくとらえる観察力や理解力、それらにもとづいて正しくかつとっさに判断し、行動する力が必要になります。

私はかつて自動車運転免許証の更新講習で、「目の前の自動車だけでなく、その前の自動車の動きも見ながら運転するように」と指導を受けたことがあります。前の自動車はその前の自動車の動きに左右されますから、動きを予め察知するために必要なことです。

「予防こそ最大の危機管理」です。これからの交通安全教育では、事故に遭わない、事故を起こさないために、交通安全の基礎的な知識と危機管理能力と、それにもとづく確かな実践力を身につけさせたいものです。

交通事故を防ぐためには、子どもも大人も、幼児や高齢者、障害者などよりも、誰に対しても思いやりの心をもつことが求められます。これは譲り合いの精神でもあります。

## 誰のためのボランティアなのか

東日本大震災の被災地をはじめ、福祉施設などでボランティア活動が盛んに行われています。これらは誰かに強要されるものではなく、あくまでも自発的な行いといえるでしょう。

ある高齢者施設でボランティア活動に取り組んだグループの人たちが、夕方帰りがけに「今日は大変お世話になりました。ありがとうございます」とお礼を言っている声を聞いたことがあります。施設の人だけでなく、ボランティア活動に取り組んだ人たちも「ありがとうございます」と言っているのです。普通に考えれば、施設の人がお礼を述べ、ボランティア活動に取り組んだ人たちは「どういたしまして」などと答えるところでしょう。

ボランティアは誰のために行うのでしょうか。ボランティアにはそもそものような意味があるのでしょうか。ボランティアとよく似た言葉に「奉仕」があります。奉仕とは、人や社会や国家のためにつくすことです。

ボランティアとは本来「相互援助」の精神に立つものです。人や社会にサービスを提供することによって、自分も生かされるという考え方にもとづいています。ボランティアは「他人（ひと）のため」に行うというよりも、詰まるところ「自分のため」に行うことだと言えます。

また、ボランティアとはその人のために何かをしてあげることではなく、その人を理解し、その人と触れ合い、その人と共に何かをすることです。そのためには、同じ目線で、同じ土俵に身を置くことが大切です。ボランティアとは、共に生きていることを実感する行為であるからです。

## 健康診断の項目変更

各学校は子どもの健康診断を行わなければならないことが、学校教育法（第12条）や学校保健安全法（第13条）に規定されています。検査の具体的な項目は学校保健安全法施行規則（第4条）に示されています。これを受けて、各学校では4月に健康診断が実施されています。

この施行規則が4月30日に改正され、検査の項目が一部変更になりました。具体的には「座高」の測定と「寄生虫卵の有無」が外されました。

座高の測定が無くなったのは、測定することにそれほど意味がないことや

結果が十分活用されていないことによるものです。座高と健康との因果関係が曖昧なことによるのかもしれませんが。ちなみに、座高の測定は昭和12年（1937年）に始まったそうです。

寄生虫卵の有無を調べる検査は、昭和33年から小学校3年以下の子どもに義務づけられ、多くの小学校では「ぎょう虫検査」として行ってきました。廃止になった背景には、下水道が整備したことや化学肥料が普及したことによって生活環境が改善され、子どもの寄生虫感染率が激減したことによるものです。最近では、検出率が1%以下で推移しているといえます。

なお、この2つの検査が廃止されるのは平成28年度からです。来年度はこれまでどおり実施されます。

## コラム 北 俊夫の「3.11」体験談(11)

### 学んだこと①一心がまえ

わが国は地震国であり、火山の多い国です。海底で大地震が起こると、津波を引き起こすことがあります。大雨が降ると、各地で土砂崩れが起こります。私たちは自然災害だけでなく、事故や事件に巻き込まれることもあります。いつ、どこで、どのような災害や災難に遭遇するかわかりません。

そのため、私たちは日頃から前兆現象などから危険を予知したり予測したりする能力や、危険から回避する能力を身につけている必要があります。これは日頃の心がまえです。

災害や事件・事故など危機的な場面に遭遇すると、どうしてもパニックを起こしがちです。心が動揺し、それが悪い行動を引き起こします。私が今回体験したことから学んだことは、危機

的な場面では冷静に行動し、決して慌てないこと、デマやうわさに左右されないこと、正確な情報を収集し、そしてそれにもとづいて適切に判断し安全に行動することの大切さです。

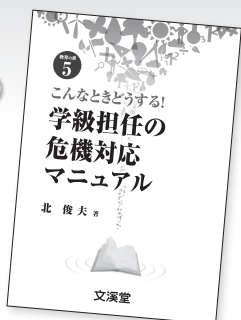
出張の当日、羽田空港から帰宅することができなくなるとはまったく考えていませんでした。しかし、よく考えてみると、その可能性はゼロではありません。地震のほかにも、水害の発生や交通手段に問題が発生すれば、いつものように帰宅できなくなることは十分予測できます。

何かが起こるのが社会であり、人生だと捉えていたほうがよいのかもしれませんが。「有事人生（事有るが人生）」です。もしものときに備えることを昔から「備えあれば憂いなし」と言われてきました。備えは物質的なものだけでなく、心にも必要だと言えます。

## INFORMATION

### こんなときどうする！ 学級担任の 危機対応 マニュアル

◎著者 北 俊夫  
◎定価 950円＋税  
◎発行 株式会社文溪堂  
A5判 96ページ



### 学級担任として こんなとき、どうしますか？

～目次より～

- 「不審者」が校舎内を歩いている
- 給食中、胸の痛みを訴えた
- 学校で物が無くなった
- 頭の毛を茶髪にしてきた
- 理科の実験中に事故が発生
- 通知表の内容についてクレームなど

## 編集後記

安全な自転車乗車に、周囲確認や危険予測は欠かせません。私自身、イヤホンをつけたランナーの急な進路変更や自転車の車道逆走など、通行者のマナーやルール意識の問題で危険にさらされた体験は多々あります。常に周囲の動きに備える意識が求められます。（T記）



企画・編集：ぶんげい教育研究所  
発行：株式会社文溪堂  
発行日：2014年9月1日